

令和7年度
武蔵野大学

一般選抜 A 日程 2 月 5 日 文系
2 時限
国語
（ 60 分 ）

【注意事項】

1. 問題は26ページまでです。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、黙って手を挙げて監督者に知らせてください。
4. 解答用紙（A）には志望学科1の受験番号を記入し、受験番号の下のマーク欄にマークしてください。次に氏名、フリガナを記入し、解答する時限と科目（国語）にマークしてください。正しくマークされていない場合には、採点できないことがあります。
5. 解答は、解答用紙（A）の解答記入欄にマークしてください。例えば、

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答記入欄の③にマークしてください。

（例）

解答 番号	解 答 記 入 欄										
	10	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

6. 問題冊子の余白等は適宜利用しても構いませんが、ページを切り離してはいけません。
7. 時間内に解答し終わっても、退出することはできません。
8. 途中で質問等があるときは、黙って手を挙げて監督者を呼んでください。

〔共通問題〕

〔一〕「土偶の意味を解き明かす」とうたつて二〇二一年に出版された竹倉史人『土偶を読む』は、専門家以外に高く評価され、大きな反響を呼んだが、考古学界側からは、その学術的な誤りを指摘する声は一部にはあったものの、ほとんど反応がなかった。なぜ考古学者が『土偶を読む』に対応しなかったかについて、この文章の筆者は、学術的に誤った本の内容を一つ一つ検証して、その誤りに対して学術的に反論することは大変な労力がかかることで、そのことから受ける利益に見合わない、すなわちコストベネフィットが折り合わないということをまず指摘した。それに続く次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

さて、以上のようなコストベネフィットが折り合わないという理由とともに、多くの考古学者が、『土偶を読む』から喚起される問題に対して当事者性を有しないと判断したことも、それに対応しなかった一因と考えられる。その問題を、考古学者の多くが自分とは直接関係しない問題ととらえた可能性がある。本論では、考古学者と十把一絡げに表現し、数千人規模の多様な専門家集団を乱暴に一括りにしてしまったが、当然、アカデミック考古学者たちの研究する時代や事物や研究方法などは〔X〕である。そのなかで土偶という一点を中心テーマにしている研究者は、さらに少ないだろう。そのため大半の考古学者は本書に応答する必要性や適格性を、自らは認め得ないのである。もちろん、遺物の解釈法や資料批判、証明法などといった考古学全般に関わる方法論からの応答は、考古学者ならば誰でもできそうであるが、だからこそ、それをあえて自分が進んでやらなければならない必然性は認められないのである。

〔A〕『土偶を読む』では、多くの考古学的な専門知が利用され、ときおり考古学者の名前もあげられるが、その大部分は竹倉の自説を補強したり、根拠づけたりすることに費やされている。竹倉の説と矛盾したり、ずれたりしている説や研究例がそれほど多くは紹介されておらず、いわゆる研究上で対峙する研究者や批判対象が具体的に明示されていない。考古学者たちは、もし自分の出した説が名指しで批判されていたら、反論せずにはいられなかったことであろう。しかしそうではなかったため、^①研究上の自分事として『土偶を読む』にレスポンスする必要性を感じなかったのである。

〔B〕、考古学が対象とする事物は、歴史学が対象とする事物と同様にロマンに溢れ、多くの人びとを惹きつけるため、いわゆるマニア、ファンといった非専門的な人びとも、長い間その事物に関わる活動を行ってきた。また、哲学者・梅原猛に代表されるような考古学とは異なる分野の専門家たちが、ときおり^②知の越境——知の領空侵犯？——を繰り返し、考古学者たちが扱う事物や時代へ言及してきた。そのなかには、考古学の専門知から判断して^③シュコウできないものがあつた。そして、考古学者はそういう状況に慣れっこになってしまった。

当然のことではあるが、考古学が対象とする事物や時代、たとえば土偶や縄文時代に關し、考古学者のみがその理解と解釈の権限を独占することはできない。大学で考古学を専攻していない人が縄文土器を独学で研究、解釈しようと、また縄文時代を主題とするロール・プレイング・ゲームで遊ぼうと、そして土偶をキャラクターとして商品化しようと、それ自体、何らかの事柄ではない。むしろ考古学の専門知を理解する、良いきっかけになったりもする。

C そういった状況だからこそ、専門家たちはその専門性に基づく専門知と、それ以外の知を区別する必要性に駆り立てられる。そして、専門の議論と非専門の議論を峻別^{しゅんべつ}し、その議論空間を棲み分けようとする。考古学に限らず、すべての学問において議論空間を専門家と非専門家とで分かつことは、専門知の信頼度を上げ、また専門語に満ち溢れた高度な議論を円滑^{じゃうくわん}に進めるためにはやむをえないことと考えられている。一方で、それは専門家と非専門家との間に壁を作り出すことでもある。そして結果、知の隔離を生み出し、知の対話を阻害してしまうこともある。

また反対に、非専門家たちも専門家たちと議論空間を共有することを嫌い、隔離を喜んで受け入れることだってありうる。知識豊富な専門家の前では、自由な発言ができない。同好の仲間が集まって、あくまで私的営みとして歴史世界のことを考え、解釈し、発想をめぐらし、ただ楽しみたいだけ。そういう議論ができる空間があっても、何らかの壁は存在しない。議論空間の棲み分けは現実的にフカヒであるが、できる限り壁を低くし、交流することによって、互いにその知を参照することが理想ではある。

『土偶を読む』では「今後の考古研究によって私（竹倉…引用者注）の仮説が追試的に検証され、遠くないうちに『定説』（＝多くの人が納得する、その時点における最も合理的な説明のこと）として社会的に承認されることを私は望んでいる」（竹倉史人『土偶を読む』）と、専門家たちの議論空間での検証を望んでいるようにも見える。しかし一方で、先に紹介したように、本書の「ジャッジを下すのは専門家ではない」と、専門家の議論空間での評価を拒んでいる。竹倉は、自らの知の置き所に戸惑っているのだろうか。

いずれにせよ、考古学者が『土偶を読む』へ十分に応答しなかったため、結果として、考古学の専門知は、その批評に活かされなかった。一方、数多くの分量の批評や紹介が、インターネットや新聞、雑誌などの考古学の非専門的メディアを中心に発表されている。そして、その評者のほとんどは、考古学の非専門家である——私もその一人である——。ここでいう非専門家とは、あくまで考古学という一つの専門に対して専門家ではないということであり、専門性を有していないという意味ではない。それは、アカデミックな異分野の専門家かもしれないし、アカデミズムとはムエンの評論家やアーティストといった専門家かもしれない。ただ、その考古学の非専門家である知の鑑定人たちは、さらに裏テーマであるとされた専門知批判を得意とする科学技術社会論についても非専門家であった。つまり、テーマの表も裏も、中核となる専門知と遠いところで、その批評がなされたのである。『土偶を読む』の「はじめに」で、竹倉は本書の通読に専門知識は不要、そして、本書をジャッジするのは考古学の専門家ではないと断言したことはすでに紹介した。その言葉通り、その鑑定人から考古学者は見事に外れたのである。

ただし、誤解がないようにいつておかねばならないのだが、この考古学者が鑑定人から外れたのは、それを宣言した竹倉のせいではない。本来なら鑑定人として適格性が高いと一般に判断される専門知をもった考古学者が、鑑定人となることを自ら控えただけである。また、鑑定人を選ぶメディアが、考古学者を選ばなかった、あるいは選ばなかっただけである。その結果、考古学の専門知がその評価に十分に反映されないという偏りを生じさせてしまった。

⁽⁴⁾専門知と社会との関係性という観点からいえば、この偏りはあまり望ましいことではない。従来は、「学会」といった閉鎖的な「ジャーナル共同体」(藤垣裕子『専門知と公共性』)が、知の「品質管理 (quality control)」を行ってきた。専門知を有する専門家集団が、それを評価する基準を定め、鑑定人を指名し、評価行為を独占し、非専門家はその品質管理の鑑定人としては見なされていなかった。そして、そういう偏りを生み出す専門家主義が、現代社会と専門知との関係性を問い直すなかで問題視されてきた。

ところが、『土偶を読む』の品質管理に関しては、まったく正反対の構図になってしまっている。『土偶を読む』の知の品質管理のⅠに、一般的に位置づけられるであろう専門家(ここでは考古学者)が大きく抜け落ちて、Ⅱとされてきた非専門家だけが残るというドーナツ状に偏ってしまったのである。それは権威的な専門家主義への反動がもたらしたものでしょうか。これもまた、知の健全な品質管理を歪めてい

る。佐倉統は新しい科学論を追究するなかで、「科学者の社会的評判が専門的な評価と正反対な状況、つまり、科学的に誤った事柄を正しいことであるかのように吹聴する連中が社会的にもてはやされるのは、しばしば危険である」と述べ、専門家たちによる評価が、学会の外の世の中にはあまり伝わらない状況を嘆いている(佐倉統『科学とは何か』)。しかし『土偶を読む』をめぐることは、その社会的評判が考古学という専門的な評価と正反対なのか、また考古学的に誤った事柄なのかという鑑定すら、実はまだ十分に取行われていない。一方で社会的には、高く評価する鑑定が数多くなされているのである。

この偏りは、科学技術社会論で専門知管理の一つの理想型として措定されている、知の「ガバナンス」という観点から評価すると良い状況ではない。ガバナンスとは、水平的で分散的で協働的な物事の決め方、運用の仕方のことである。知のガバナンスの担い手は、専門家に限らず非常に多様なアクターが想定されており、当然、非専門家、そして一般市民なども含まれる。それらが対等な関係で結ばれたネットワークでつながり、ときに協働し、ときに競い合いながら知を管理していくのである(平川秀幸『科学は誰のものか』)。このガバナンスというあり方から専門知の品質管理を考えれば、そこにも多様な人びとが関わるべきである、ということになる。それを『土偶を読む』の評価に引きつけていうならば、本来ならば、専門家である考古学者と、非専門家である多様な鑑定人たち、さらには一般市民の読者などが対等な関係でつながり、ときに協働し、ときに競い合いながら本書のシンカを問うべきであったということになる。

アカデミックな学術論文などの専門知は、専門家仲間の専門的な狭い基準による「ピア・レビュー」(同じ専門領域の研究者による研究の評価)に基づいて品質管理がなされている。また大学教員といった専門家は博士号などの「学位」や、就職の際の業績審査などによって専門家

としての品質管理が行われている。それはとても面倒臭いし、ときにはあてにならないこともあるのだが、確からしい知を獲得し、その信用性や信頼度を高めるためには必要不可欠である。しかし現代社会では、学問的でありつつも社会的、経済的、政治的な幅広い関心を含む Ⅲ によって複数の広い基準が追加されて品質管理を行うことも求められている（マイケル・ギボンズ『現代社会と知の創造』）。その点において、多様な背景をもつ鑑定人たちが、多様な観点から『土偶を読む』を評価したことは問題ではない。ただ、そこに考古学者という専門知の鑑定人が不在だったことが問題なのである。

古今東西、専門家は尊敬と侮蔑という正反対の評価を受けるアンビバレントな存在である。高度な教育を受けて、普通の人びとにはない高度な知識をもたらず教養人のイメージ。学歴や知識をひけらかし、普通の人びとを見下す忌むべきエリートの権威的なイメージ。 Ⅳ がなく頭でっかちで、専門ばかなイメージ。元来、専門家はこのような Y 両面をもった存在であったが、しかし、いま世界が反知性主義に席卷（せうけん）されつつあるなか負の側面ばかりが強調され、それが保持する専門知までも軽視されようとしている。

反知性主義と聞くと、何やら無知・無教養の人びと、あるいは実証性や客観性を （お）蔑ろにし、論理的な思考をめぐらすことのできない人びとが、知性ある知識人や専門家をキュウダンする不健全な知の大衆迎合主義をイメージするかもしれないが、実はそうではない。一九六三年にピュリッツァー賞を受賞した R・ホーフスタッターは、反知性主義を喧伝（けんでん）するスポークスマンは、無学でなければ無教養でもない、むしろ知識人のはしくれ、自称知識人、仲間から除名された知識人、認められない知識人であるとする（R・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』）。本来、反知性主義は知識をめぐる独占的な権力行使に対する反感であり、専門家や専門知への積極的な異議申し立てだった。

そのような反知性主義が徐々に傲慢になって世界中に拡散する一方、同時に先に述べたようなパブリックな学問が発展して、何かについて考えたり、究めたり、発表したりする知識生産が民主的にコントロールされるようになった。インターネットなどのデジタル技術は、そのような知のデモクラティックコントロールを進展させることに大きく寄与している。結果、極端に言えば、資格や経験、知識の有無にかかわらず、誰でもものを書いて発言できる時代が到来したのである。それ自体は大局的には望ましい状況である。

しかしその時代は、個人的感情や信条へアピールする物事の方が、客観的な事実よりも人びとへ影響力を与え、むしろ真実として受け入れられる「ポスト真実時代（post-truth era）」でもある。その時代は、専門家がもたらす客観的な専門知ではなく、ウェブメディア上のフェイクニュースや、ソーシャルメディアで仲間内に拡散されるつぶやきの方が現実を創り上げるといふ時代である。二〇一六年のアメリカ大統領選挙において、ドナルド・トランプ支持者向けのニュースサイトがフェイクニュースを流し、多くの人びとがそれを信じ煽動（せんどう）されたことは記憶に新しい。同様のことが日本でも、過去の戦争責任に関する歴史修正や、二〇一九年に発生し翌年パンデミックとなった新型コロナウイルス感染症をめぐって現出している。

このように誰もが自由に知識を入手し、発信できるようになったいまだからこそ、また専門家の力が及ばぬ「知外法権Ⅱ知の治外法権」の

マーケットが広がり、消費者の好み、感情といったニーズに迎合する商品化された知が大量に流通しているいまだからこそ、ポスト真実の落とし穴に陥らず、批判的に品質を管理された良質な専門知、そして良質な知の鑑定人としての専門家が必要なのである。

専門知を尊重することは、その社会が健全であるための必須要件である。もちろん、かつてのように専門家が、知やそれをめぐる制度、決定権を独占するような尊大な専門家主義を復活させろ、と主張しているのではない。多様な人びとがフラットにつながり、協働しながら多様な知の鑑定をする「知のガバナンス」において、専門知という観点から確からしい知の鑑定を行う役割を専門家は十全に果たさなければならない、と主張しているのである。多様な価値観、尺度による知の鑑定のなかで、専門知批判はあっても良いが、専門知否定はあってはならない。

（菅豊「知の「鑑定人」」による。小見出し、注の一部は省略した）

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解
答番号は

1

5

。

(ア) シュコウ

1

- ① 戦争を解決するためのシュノウ会談が行われた
- ② 戦争体験者のシュキが公開された
- ③ シュコウをこらした料理が提供された
- ④ 労働力をサクシュするような企業
- ⑤ 彼は党内のシュキユウ派に属している

(イ) フカヒ

2

- ① 国会議員のサイヒを削減する
- ② 新しい技をヒロウする
- ③ ヒキンな例をあげて説明する
- ④ 安全な場所にいちはやくタイヒする
- ⑤ 彼女の実力にヒケンする者はいない

(ウ) ムエン

3

- ① エンギをかついで同じ服を着る
- ② 犯行の動機はエンコンによるものだ
- ③ 企業のエンカクを調べる
- ④ 舞台上のエンギに注目する
- ⑤ 海外の文献をエンヨウする

(エ) シンカ

4

- ① 鉄道のコウカ下にある商店
- ② レンカで手に入れた商品
- ③ カカンに挑んで成功した
- ④ 彼女はカモクな性格だ
- ⑤ 彼は父からカトクを譲られた

(オ) キュウダン

5

- ① 年金をジュキュウする年齢
- ② 会議がフンキュウする
- ③ 隣国のキュウジヨウに手を差し伸べる
- ④ 日本の知識カイキュウの人々
- ⑤ セイキュウに決定をくだす

問二 空欄 X・Y に入る語句として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

Xは 6・Yは 7。

X

- ① 一日千秋
- ② 多種多様
- ③ 前途多難
- ④ 千変万化
- ⑤ 日進月歩

Y

- ① 自負
- ② 勝負
- ③ 正統
- ④ 正負
- ⑤ 正誤

問三 空欄 A (C に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 8。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| ① | A | それゆえ | B | ただ | C | また |
| ② | A | ただ | B | それゆえ | C | さらに |
| ③ | A | ところで | B | だから | C | だから |
| ④ | A | だから | B | ところで | C | それゆえ |
| ⑤ | A | また | B | さらに | C | ただ |

問四 空欄 I ・ II に入る語として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は I は 9 ・ II は 10。

- | | | | | | |
|----|------|------|------|------|------|
| I | ① 片隅 | ② 重心 | ③ 頂点 | ④ 円周 | ⑤ 中核 |
| II | ① 表面 | ② 極点 | ③ 中心 | ④ 支点 | ⑤ 周縁 |

問五 空欄 Ⅲ・Ⅳ に入る語として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号はⅢは

11・Ⅳは 12。

Ⅲ

- ① 象徴性 ② 妥当性 ③ 独創性 ④ 偶然性 ⑤ 一貫性

Ⅳ

- ① 合理性 ② 主体性 ③ 社会性 ④ 普遍性 ⑤ 正当性

問六 傍線部(1)「研究上の自分事として『土偶を読む』にレスポンスする必要性を感じなかった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

① 『土偶を読む』で利用されているアカデミックな考古学者の説は、『土偶を読む』の解釈を補強するために用いられているものばかりで、具体的な説を批判しているわけではなかったため、それを放置しても考古学界には害はないと判断したため。

② アカデミックな考古学者は、非専門家のマニアによる独自の解釈に慣れてしまっていたために、それが専門的に認められない間違いだと感じて、そのことを指摘せずにやり過ごすことが慣習となっていたため。

③ アカデミックな考古学者には、土偶の正体を解明するという『土偶を読む』のテーマ設定は非常に限定的なものに思えたばかりか、考古学者の説が直接批判されているわけではなかったため、それに応答する必然性を感じなかったため。

④ 『土偶を読む』で書かれていた土偶の解釈は、誰もが思いつくような単純で安直なものだったため、アカデミックな考古学者にとって、わざわざ時間をかけて返答するまでものではないと考えられたため。

⑤ かりに専門的な誤りを含んでいたとしても、『土偶を読む』が広く読まれたことは、人々が考古学の世界について関心を持つ良いきっかけとなると考えられ、アカデミックな考古学者が学問的な誤りを指摘するよりもこのまま読まれた方が良いと考えたため。

問七 傍線部(2)「知の越境——知の領空侵犯?——」とあるが、筆者がこのように表現する意図はどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 他分野の専門家が考古学の分野に言及する内容は、考古学界に対する挑戦的なものが多く、しばしば専門的な考古学者と衝突を生んでいる。そうした状況をよく知っている筆者としては、それを「侵犯」という言葉で表現したい。
- ② 他分野の専門家が考古学の分野に言及することは、「越境」ともいえる知のダイナミズムが生み出されるきっかけになるため、筆者にとっては肯定すべき事態である。その一方でそのことを良く思わない考古学の専門家もいるため、その両面をあわせて表現したい。
- ③ 他分野の専門家が考古学の分野に言及する内容は、非専門家である筆者にとっては、その正誤を判断することができないと感じている。それを「越境」として肯定的にとらえてよいのか迷っている気持ちを表現したい。
- ④ 他分野の専門家が考古学の分野に言及する内容は、非専門的で独善的なものが目立つものの、広く世の中に受け入れられているものも多い。筆者としてはそうした状況について、「越境」という肯定表現、「侵犯」という否定表現、どちらでもない公平な態度で表現したい。
- ⑤ 他分野の専門家が考古学の分野に言及することは、一般的には肯定的に「越境」といえるが、そうしたものには学問的には認められないものも多い。その意味では考古学界の領域を「侵犯」しているともいえ、その肯定否定の両面を含めて表現したい。

問八 傍線部(3)「知の隔離」とあるが、それはどのような状況か。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 専門家が知の信頼度を上げようと考えて、非専門家が理解できないような高度な議論をすることで、かえって専門家たち自身が知から離れてしまう状況。
- ② 自由な議論をするために、非専門家たちが専門家を排除した空間をつくり、専門家たちは学問の正確性を求めてその空間に入ろうとしている状況。
- ③ 専門家と非専門家がお互いの議論空間を棲み分け、互いの空間で熱心に議論を積み重ねることで、双方が共有できる知の信頼度を上げようとしている状況。
- ④ 専門家が専門性にみちた議論をしたいと考えてつくった議論空間において、非専門家が知の議論を阻害するようにふるまうことで、専門的な知から遠ざけられてしまう状況。
- ⑤ 高度で専門的な議論をするために、専門家が非専門家を排除した自分たちだけの空間をつくり、非専門家はその空間に入れず、お互いに交渉がない状況。

問九 傍線部(4)「専門知と社会との関係性という観点からいえば、この偏りはあまり望ましいことではない。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 『土偶を読む』の場合は、その内容が正しいかどうかを鑑定する鑑定人は考古学の専門家から選ばれるべきだったが、メディアが専門家を選ばなかったために、その内容の真偽が不明のまま広く社会に受け入れられてしまうような状況になってしまっているから。
- ② 『土偶を読む』の場合は、専門家集団だけがその本の評価基準を定め、独占的に評価を下しているため、読者など一般市民を巻き込んで対等に評価を下していくという現代社会と専門知のあるべき姿とはほど遠い状態になってしまっているから。
- ③ 『土偶を読む』の場合は、非専門家と読者だけが本の評価に関わり、専門家が評価に関わっていないため、非専門家や一般市民などが専門家と対等に関わり合いながら、知の信頼性を高めていくという現代社会と専門知の理想の形とは異なる状態になっているから。
- ④ 『土偶を読む』の場合は、多くの読者に読まれ、メディアにおいて数多くの批評がうまれたが、本来は専門家こそが専門的な目で評価を行い、学問的に正しいのかどうかを広く社会に示していく必要があるのに、それがなされないまま広く流通してしまったから。
- ⑤ 『土偶を読む』の場合は、科学的に誤っていることが述べられているにもかかわらず、社会的に高く評価されてしまったために、専門家である考古学者はそれを否定することをためらい、広く発信しようとしなかったから。

問十 傍線部(5)「商品化された知」とはどのようなものか。その内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① 普通は値段が付けられない貴重なものだが、人々の求めに応じて商品化されているもの
- ② 実際の商品価値とは別に、安く買って買いやすい値段に設定されているもの
- ③ 一般には難しく理解しがたい物事だが、丁寧に解説して売っているもの
- ④ 人々の好みがあればらで普通は売りにくいものを、商品として工夫し売られているもの
- ⑤ 実際に正しいかどうかは関係なく、人々が正しいと思いたいもの

問十一 傍線部(6)「専門知批判はあっても良いが、専門知否定はあってはならない」とあるが、筆者はどのような社会が好ましいと考えているか。その内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 専門家だけでなく、一般市民も知の鑑定に参加するような社会が健全な社会である。特に反知性主義が拡散する現代においては、専門家がこれまで築き上げてきた専門知が周囲から批判されずに、真実として尊重されるような社会が理想的な社会である。
- ② 専門家だけが知を鑑定し決定するような社会は健全ではないが、だからといって、専門家による知が無視され否定されるような社会も健全ではない。専門家に限らず、さまざまな人々によって、批判的に知が検証される社会こそが健全である。
- ③ 専門家が知の決定を独占してきた今までの社会は健全ではなかった。これからは専門家は広く一般市民と協力しながら、誰からも否定されないような絶対的な知を確立していくことに努め、健全な社会をつくっていくべきである。
- ④ 真実が見えにくくなり、人々がそれに煽動されやすくなっている現代社会は不健全である。専門知の観点から正しい情報を見極めることのできる専門家の役割が、より尊重され、専門家もその役割を正しく果たすことのできる社会が健全である。
- ⑤ 誰もが自由に情報を発信できるような望ましい現代社会においては、情報の質を管理する専門家の役割が重要である。知を否定するような反知性主義に対抗して、専門家が新しい知の枠組みを創り、知の鑑定能力をより鍛えることを目指すような社会が理想的である。

問十二 次の生徒A～Fの会話は本文を読んで内容について話し合ったものである。これらの生徒の発言の中から、本文の主張に合致しないものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は

19

 ・

20

 。

- ① 生徒A 『土偶を読む』は私も面白く読んだけど、それに対する考古学者の批判は読んだことがないな。筆者によれば、それは『土偶を読む』の著者が要求しているかどうかには関わりなく、考古学者自身がそれを控えたのだということだけだ……。
- ② 生徒B それについてはメディアの問題も指摘されているよ。メディアは、その内容が正しいかどうかの鑑定については、考古学者を選ばなかった、もしくは選べなかったのだと。
- ③ 生徒C 多くの読者に読まれたということは、専門家だけではなく、非専門家である一般読者も一緒に互いに意見を交わしながら、本の内容の価値を考えるような開かれた知の検証の可能性があったわけだね。結果としてそうはならず非常に惜しいよね。
- ④ 生徒D 専門家同士の「ピア・レビュー」という言葉は初めて知ったけれど、反知性主義がはびこっている現代社会においては、確実に信頼できる知を得るための手段としてより重要になってくるはずだね。
- ⑤ 生徒E 「反知性主義」という言葉もよく聞くね。論理的な思考のできない感情的な、「知」とは正反対の人々のことを指す言葉だと思っていたけれど、もともとは「知」を独占している権力に対して物を申す行為のことを指していたんだね。
- ⑥ 生徒F フェイクニュースやデマなどが溢れているネット社会で、どのようにSNSを使いこなしていくか。誰でも簡単に情報を発信できるようになった現代だからこそ、SNSとのよりよい付き合い方を考えていきたいね。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

その昔、江戸の社会秩序は、表向きには「タテ」に厳密に分割統治されていた。ひとが、この社会の一員であると認められるためには、村や町、寺社、職業上の団体など、何かの社会集団に属していることが必須だった。その社会集団の性格は様ではないが、その所属が「身分」を決め、それぞれこの殿様やお公家^{くげ}さん、お奉行、お代官、などの「支配」を受けるかについては決まっていた。年貢を納めたり、届出をしたり、裁判を起こしたり。およそ現代でもお役所が絡むようなことは、江戸では属する社会集団を通して、その決められた「支配」にリポートしなくてはならない。この時代の人びとは、こうして表向きの「社会的な自己」と「役割」の立ち位置が決まっていた。

まるで、現代社会におけるさまざまな弊害をもたらした「タテ割り行政」の元祖のようだが、しかしそれで終わらないのが江戸の奥深さだ。むしろ窮屈な「タテ」の構造をバネにして、それを迂^う回^{かい}する広くてしなやかな「ヨコ」のネットワークが日本中にぐるぐると広がっていた。なにしろひととは動き、物は流通する、そして情報はそれにつれて飛び回る。この循環がタテ割りの「枠」を揺り動かし、その外でのヨコの交際の機会が広がっていったのだ。

表向きの構造の裏では、芸名などの江戸的儀礼装置に守られながら、まるでサーキットを開放したような、自由な「ヨコの繋^{つな}がりの場」が存在していた。そうしたコミュニケーションの場のことを、社会的また認知的なネットワークが交差するところに誕生する隠れ家「パブリック圏」と私は定義づけている。「パブリック圏」とはコミュニケーションが起こる「場」を指している。パブリック圏には、隠れ家タイプだけでなくいろいろな種類があるが、一般的にいろんなネットワークを内部にも抱えている人間は、「パブリック圏」でネットワーク接続のギアチェンジを行うのだ。江戸の社会では、「タテ」秩序の構造下においては、まるで蝶^{ちょうちゅう}々の標本のように身分や社会的役割にがんじがらめになった人びとが、^①隠れ家「パブリック圏」のなかにおいては、実に自由に羽ばたき、そのアイデンティティも、翅^{はね}の色さえも、限りなく七色に変える場が広がっていた。そうしたお江戸の隠れ家のような「パブリック圏」に、とくに私は深く魅了されたのだ。

さて、時は流れて、現代社会。この世界でそれに類するネットワークの交差する場とは、どこだろう。考えをめぐらせるまでもなく、その典型はインターネットを媒介としたネットワークであるだろう。学究対象として真剣に取り組まざるを得ないと思うようになった約十年前、私がまず試みたのは、自分自身の「アバター」を作ることだった。

「アバター」。それはネットワーク上の仮想空間におけるユーザーの分身のことだ。オンラインゲームやチャットなどには、自分好みの顔や服装をした分身を使い、コミュニケーションを交わせるサービスがある。2010年に公開された同名SF映画を想起する方も多いだろう。あの

作品は、最新CG技術を駆使した3D映像で、主人公の元兵士が、人間と先住民のDNAを組み合わせた「アバター（分身）」に、自身の意識を送り込む映画だった。それは、もし、ひとが第二の身体と心、そしてその心身にふさわしい対人関係と自然環境をもたらさうなるか、という深い問いを含んだ映画だった。「アバター」はもともとインドの言葉で、聖なるものが地上に降り立った仮の姿のことをいう。このデジタル時代の仮想世界においては、大好きな動物のアバターになったり、別のジェンダーになったり、ということが頻繁に起こっている。自分のなかのある部分・気持ちを形象化したそんな分身を使い、他の人びとと交流する形態。人間のアイデンティティの複雑さを目に見える形で示され、私の研究意欲は大いに掻き立てられた。

『「アバター」的分身主義から、個性を見てみよう』。ひとの個性はさまざまな刺激を受けながら成長し、移り変わっていくものだ。そして、ひとの個性はひとつのカテゴリーだけに収まらない。ひとを、まるで「封建制下の虫ビシ」のように一つのアイデンティティだけに固定するのではなく、『「アバター」のネットワーク』として考えるほうが、理にかなっているはずだ。

いくつものアイデンティティのなかを蝶々のように行き来する自由さは、ひとをラクにさせてくれる。「アバター」を作ってweb空間を回遊してみると、擬似3D空間のなかで自分の「アバター」を操りながら、他者と交際するいくつもの光景を目の当たりにした。そして、その空間のなかに、発達障害などのさまざまな障害を抱える人びとが、社会の作り上げた既存のカテゴリーを軽やかに乗り越え、交際の輪を広げている。覗き込んでみると、それは私の想像をはるかに超えた、豊潤な世界が広がっていた。

というわけで、思わぬ脇道から私の研究は、「コミュニケーション、社会的相互行為に障害が現れる」とされている「自閉スペクトラム症（ASD）」のひとつたちの研究にのめり込んでいった。幸い、冒険やイノベーションに対しては好意的な眼差しをもつ米国において、この研究は「米国立科学財団」「ロバート・ウッド・ジョンソン財団」などの援助を得て、研究助手をつとめる10人以上の院生たちの研究グループができ、楽しく有意義な研究となった。

ただ、私は歴史社会学者として国際的にいささか知られてきたことで、「池上は江戸から『アバター』、それも自閉症の研究にテーマを変えた」というのが、一般的な反応だった。

私は、江戸の緩い「ヨコ」の繋がりが、「パブリック圏」をひらひら舞う蝶々こそが、現代における「アバター」の近似系だととらえていた。江戸の社会では面白いことに、現実世界に仮想世界のような「仙境」を、趣味世界のネットワークのなかで作りに上げていた。江戸のひとたちは、ひとりで10個の名前をもち、使い分けていたひとと珍しくなかった。誰もが趣味の世界で、いわば「バーチャルキャラクター」を使いながら、自由を得ていたのだ。（中略）私のなかでは江戸と現代はまったく繋がっていったのだ。（中略）

ひとの個性をindividualityつまり「分けられないもの」と考える西洋的な個人主義は、その分けられない究極の自己を追求しようという衝動に人を駆り立てる。でもそれは玉ねぎの皮をむくようなもの。『『本当の自分』探し』を他人にも自分にも強いものであり、他者にひとつのレ

ッテルを貼りやすく、どうしたって不寛容になっていく。「アバター」的分身主義は、何も日本固有のものではない。むしろ普遍的な、ひとの脳の構造と働きから生まれてくるものだ。優しいお母さんであつても、一見さえないおじさんであつても、それは、その場その場のひとや言葉、環境などに触発されて出る「分身」であり、そのほかにもさまざまな自分があり、その歴史があるはずだ。個人とは、「複数の『アバター』のネットワークの集合体」といえる。「玉ねぎ主義」より「『アバター』主義」。複数のアイデンティティがあることを前提とする「アバター」的分身主義は、誰しもを、すこし軽い自由な気持ちにさせるのではないか。

インドや中国、日本などには「曼荼羅^{まんだら}」というものがある。曼荼羅はふつう究極の仏なり神なりが、仮の姿で地上に降り立つてくるさまざまな形の「権現」や「分身仏」をいくつも描いている。究極の存在は本来「かたち」があるものではない。しかしそのさまざまな仮の姿の分身仏や神たちが、「権現」つまり「地上に仮に現れた」姿として、より地上的な存在として人間を救ってくれたのである。この「分身」をサンスクリット語で「アバター」という。ヒンズー教でよく使われるが、米国の美術館などでは日本の「曼荼羅」展示の解説にも分身仏を指してアバターと呼ぶ。この「アバター」＝「分身」主義的な自己観、曼荼羅的な自己像⁽⁴⁾……それは西洋的な個人主義的な考えとはおよそ異なっている。デジタル時代における「代理の自己」を「アバター」と呼ぶようにしたのは、ある意味で「深い翻訳だなあ」とつくづく感嘆してしまうのだ。

先ほど「自閉スペクトラム症」の例を挙げたが、彼らにしても、医師やセラピストの部屋にいるときは、「症状」を語ることが中心になるわけだが、そうは言ってもいつも診断名から範疇^{はんちゆう}化されたアイデンティティだけで生きているわけではない。私は「自閉スペクトラム症」のひとたちと接していくなかで、多数派でないというだけで、彼らの知性のありかたを医療の次元のみで考えることを「もったいない」と感じるようになった。いかに人間の知性、インテリジェンスというもののかたちが多様であるか。それが多数派ではなくとも、それぞれに個性的で豊かな世界を抱える彼らの「ニューロ・ダイバーシティ（神経構造の多様性）」である。神経構造の多様性とは脳のダイバーシティであり、創造性やイノベーションの土壌でもある。自閉症を含め、「普通」とは異なる才能に恵まれ、脳の働きが異なるひとたちのことを十把一からげに包摂し、「障害・非障害」という二分法を用いるのに抵抗を覚えた私は、彼らを「非定型インテリジェンス」と名付けた。⁽⁵⁾（中略）発達障害をマイナスと決めつけるのではなく、まずインテリジェンスのひとつの形として、ありのままにとらえる——そこから出発していききたいものだと思う。

（池上英子「江戸と仮想世界」による）

（注）自閉スペクトラム症（ASD）……Autism Spectrum Disorderの訳語。自閉症スペクトラム障害とも。人との相互的な意思疎通や状況に応じた適切な行動をとりにくかったり、特定の物事へのこだわりが強く柔軟な対応ができなかったりするなど、自閉症の特性を示す発達障害の総称。

問一 傍線部(1)「隠れ家「パブリック圏」のなかにおいては、実に自由に羽ばたき、そのアイデンティティも、翅の色さえも、限りなく七

色に変える場が広がっていた」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番

号は 21。

- ① 江戸時代の人びとが年貢を納めたり、届け出をしたり、裁判を起こしたりするときには、表向き、奉行や代官などの支配者に報告したが、そこには常に抜け道があったということ。
- ② 江戸時代の人びとは、表向きは社会秩序の中での身分や役割に縛られていたが、自由な「ヨコ」の繋がりの中で、複数の自己像や役割を様々に使い分けて他の人びとと交流していたということ。
- ③ 江戸時代の人びとは、表向きの「社会的な自己」と「役割」の立ち位置が決まっていたが、唯一の例外として、裕福な町人だけは財力によって実質的に自由に振る舞うことが出来たということ。
- ④ 江戸時代の人びとは、むしろ支配する側とされる側という窮屈な「タテ」の社会構造をばねとして、それを迂回^{うかい}することのできる「ヨコ」のネットワークを広げていたということ。
- ⑤ 江戸時代の人びとは、確かに身分や社会的役割が決まっていたものの、実態としてそれは表向きのことに過ぎず、人びとの暮らしはかなり自由度が高かったということ。

問二 傍線部(2)「『アバター』のネットワーク」として考えるほうが、理にかなっているはずだ」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① 現代社会において一人一人の個性は、現実世界ではなく、ネットワーク上の仮想空間におけるユーザーの分身であるアバターを通じたネットワークの中にこそ立ち現れるということ。
- ② ひとが第二の身体と心、そしてその心身にふさわしい対人関係と自然環境を手にしたとき、人間のアイデンティティはより複雑なものになると考えるのが妥当だということ。
- ③ デジタル時代の仮想世界では、ひとは好きな動物や、別のジェンダーなどのアバターになることを自由に行えるので、アイデンティティの形は従来と大きく変わるのが当然だということ。
- ④ ひとの個性はひとつのカテゴリーだけに収まるものではなく、その場その場での相手や言葉、環境などによって触発されて現れる、複数の自己の分身の集合体として考えるのが妥当だということ。
- ⑤ 擬似3D空間の中で、一人の人間が複数のアバターを操りながら他者と軽やかに交流する光景を目の当たりにすると、仮想空間の中でのこととはいえ、一つの現実と認めざるを得ないということ。

問三 傍線部(3)「『アバター』的分身主義は、誰しをも、すこし軽い自由な気持ちにさせる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23。

① 江戸の人びとは、一人で十個の名前を持ち、場面や状況に応じて使い分けることも珍しくなかったのであり、いわばバーチャルの世界でバーチャルキャラクターを使いながら、精神の自由を少しは得ることができていたということ。

② ひとの個性を「分けられないもの」と考える西洋的な個人主義は「本当の自分」を追求することを他人にも自分にも強いるので不寛容になりがちだが、一人の人間に複数のアイデンティティがあることを前提として考えることで、そうした「自分探し」の強要や不寛容さを少しやわらげられるということ。

③ ひとの個性を「分けられないもの」と考える西洋的な個人主義は、玉ねぎの皮をむくような終わりのない「本当の自分探し」を他人にも自分にも強いるが、江戸時代の日本固有のアバターの分身主義を取り入れて西洋的な個人主義を相対化することで、その弊害は大きく回避できるということ。

④ 一人の人間の個性が、複数のアイデンティティから成り立つということは、人間の脳の構造と働きからすれば必然であり、例えば優しいお母さんであっても、一見さえないおじさんであっても、様々な自分があり、それぞれに歴史があるのは当然だということ。

⑤ アバターとは本来、神仏が地上に降り立つときの仮の形、「分身」をいうサンスクリット語であり、その由来から見ても、一つの個性を複数のアイデンティティの集合体として捉えるという内実から見ても、西洋的な個人主義による考え方とは大きく異なっているという点。

問四 傍線部(4)「ある意味で『深い翻訳だなあ』とつくづく感嘆してしまうのだ」とあるが、筆者はどのようなことに感嘆しているのか。

その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 24。

- ① インドや中国、日本などにある曼荼羅では、神仏などの究極の存在は本来かたちがあるものではないとされる。その神仏が地上に現れるときの仮の姿である「権現」や「分身仏」こそがアバターの語源であり、そうした超自然的^{けいじじょう}で形而上的な深遠な世界が翻訳の背景にあるということ。
- ② ヒンズー教によく見られる意味でのアバター、つまり分身主義的な自己認識や、神仏などの究極の存在は本来かたちがあるものではないとする曼荼羅的な世界観は、西洋の哲学や思考法に慣れた現代の私たちには新鮮で好奇心をそえられるものであり、もっと知りたいと思わせるものであるということ。
- ③ アバターという語は、サンスクリット語で神仏の分身を意味するという非西洋的な由来を持つ。そのことは、アバターの分身主義が西洋的个人主義を相対化し、その束縛から人々を解放する可能性を持つことにも関係づけられるので、デジタル時代における「代理の自己」の翻訳として深い意味をもたせることができているということ。
- ④ アバターという語はサンスクリット語で、本来かたちを持たない神仏が地上に仮に現れたときの姿である「権現」や「分身仏」を指す。そのアバターの分身主義が、現代社会で自閉スペクトラム症を知の多様性の一つとして捉え直すことを可能にすることは、まるで神仏の深い慈悲が与えられたかのようなということ。
- ⑤ 自閉スペクトラム症の人たちは、多数派ではないというだけで、彼らの知性のあり方を医療の次元でのみ考えるのはもったいないことである。彼らの知性のあり方から、人間の知性のあり方がいかに多様であるかを教えられるのであり、アバターの分身主義の真の意義が実感できるのもその点であるということ。

問五 傍線部(5)「非定型インテリジェンス」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 25。

- ① 「普通」とは異なる才能に恵まれ、脳の働きが他と異なることを、少数派であっても価値としてマイナスと決めつけずに、知性の多様性の中での一つの形としてありのままに捉えたもの。
- ② 人間の知性、インテリジェンスというもののカタチが多様であることを前提として、他とは異なり少数派であるような知のあり方を、むしろ希少だからこそ価値があると捉え直したもの。
- ③ 「普通」とは異なる才能を持ち、脳の働きが他と異なる人たちを一括ひとくくりにすることを批判し、一人一人の知性のあり方を支援することを目的に、全て肯定的に捉えようとしたもの。
- ④ 「普通」とは異なるが、それぞれに個性的で豊かな内面世界を持つ人たちの神経構造の多様性を、特にそれが創造性やイノベーションの土壌になるという側面に注目して再評価したもの。
- ⑤ 自閉スペクトラム症の人たちのアイデンティティのあり方を、医療の観点から「症状」としてのみ捉えるのではなく、それぞれが固有に持つかけがえない個性として捉えようとしたもの。

問六 本文の主旨に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 江戸時代の人びとが社会の一員であると認められるために、何らかの社会集団への所属が必須だったことは、現代社会でも様々な弊害をもたらす「縦割り行政」の原型である。
- ② 江戸時代の人びとは一見すると社会での身分や役割、儒教的な価値観などに縛られていたように思えるが、実際には極めて自由な暮らしを謳歌おうかしていた。
- ③ 映画『アバター』が提示した「もし、ひとが第二の身体と心、そしてその心身にふさわしい対人関係と自然環境をもつたらどうなるか」という問いは、今私たちが考えるべき喫緊の課題である。
- ④ 江戸時代の人びとがそうであったように、一人の人間が複数のアイデンティティを持ち、その場その場に応じて複数の自己の分身を使い分けるのは、日本文化に特徴的なことである。
- ⑤ ひとに複数のアイデンティティがあることを前提とするアバターの分身主義は、「本当の自分」を追求するあまり不寛容になりがちな西洋的個人主義の窮屈さから人々を解放する可能性がある。

〔二〕 古文 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

清原王の一子俊蔭は、幼少から学才に優れ、十六歳の時に遣唐使船に乗って日本から唐に渡ったが、途中、暴風雨に遭って異国に漂着し、仙人らから琴を習い、またその地で不思議な三十の秘琴とその奏法を得た。二十三年目に帰朝した俊蔭は妻を迎え娘をもうけたが、帝に命じられて琴を弾くと天変地異の不思議が起こり、帝は俊蔭に皇太子（東宮）の琴の師となるように命じた。

俊蔭申す。「年いときなきほどに、父母を離れて、唐土へ渡されぬ。^(ア)あたの風、大いなる波に漂はされて、知らぬ国にうち寄せらる。深き悲しび、これに過ぎたるはなし。からくして帰りまうで来たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る。むかし、^(注2)宣旨にかなひて、たびたびの試みをたまはりて、唐土に渡されぬ。父母あひ見ずして、長く別れて、悲しびはあまりありといへども、^(注3)まねび仕うまつるいさみはなし。無礼の罪には当たるとも、この琴はまねび仕うまつらじ。」と申して、^(イ)まかり出でぬ。

かくて、おほやけにもかなはず、^(ウ)官、位も辞して、三条の末、京極の大路に、広くおもしろき家を造りて、娘に琴を習はす。娘、一わたりに^(ガク)楽一つを習ひて、一日に大曲五つ六つを習ひとりつ。同じくかき鳴らす声、父にまさる。父が弾く手、一つ残さず習ひとりつ。

このほど、家貧しくして、^(注4)思ふほどにしたてず。十二、三になる年、^(カ)容貌さらにいふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ。心のらうらうじきこと、世に聞こえ高くて、帝、東宮、父に召す。娘にも御文たまへど、^(エ)われも御返事聞こえず、娘にも御返しもせさせず。さらぬ^(カ)上達部、親王たちは、まして御文見入るべくもあらず。「娘は天道にまかせたてまつる。天の掟あらば、^(オ)国母、女御ともなれ。掟なくば、山賤、民の子ともなれ。われ^(トモ)乏しく貧しき身なり。いかでか高き交じらひはせさせむ。」といひて、よき人のたまへど、耳にも聞き入れず。家の門はめぐり鎖して、帝、東宮の御文持たる御使ひ、なべての人の使ひは、明けたてば立ち並みたれど、出で入りもせず。

『うつほ物語』による

(注1) あたの風……航行を妨げる逆風。

(注2) 宣旨にかなひて……帝の仰せに應じて。

(注3) まねび仕うまつるいさみはなし……東宮に琴をお教え申し上げる気力はありません。

(注4) 思ふほどにしたてず……娘を思うように養育することもかなわない。

問一 傍線部(ア)「渡されぬ」の文法的説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 27。

- ① 下二段活用の動詞の未然形 + 尊敬の助動詞の連用形 + 打消の助動詞の連体形
- ② 四段活用の動詞の連用形 + 可能の助動詞の未然形 + 完了の助動詞の終止形
- ③ 四段活用の動詞の未然形 + 受身の助動詞の連用形 + 完了の助動詞の終止形
- ④ 下二段活用の動詞の連用形 + 使役の助動詞の未然形 + 打消の助動詞の終止形
- ⑤ 四段活用の動詞の未然形 + 自発の助動詞の連用形 + 完了の助動詞の連体形

問二 傍線部(イ)「まかり出でぬ」・(ウ)「習ひとりつ」の主語を、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は (イ) は 28 ・(ウ) は 29。

- ① 俊蔭 ② 俊蔭の父母 ③ 俊蔭の娘 ④ 帝 ⑤ 東宮 ⑥ 上達部や親王

問三 傍線部(エ)「われも御返事聞こえず、娘にも御返しもせさせず」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 30。

- ① 帝や東宮は、俊蔭の娘に手紙を送ったが、娘からの返事が来ても、さらに返事を返すことはなかったということ。
- ② 俊蔭の娘付きの女房は、帝や東宮から娘への手紙が来ても、自分も返事をせず、娘にも返事をさせなかったということ。
- ③ 俊蔭は、帝や東宮から娘への手紙が来ても、自分も返事をせず、娘にも返事をさせなかったということ。
- ④ 上達部や親王たちは、俊蔭の娘に手紙を送っても、娘からの返事は来ず、さらに手紙を送ることはなかったということ。
- ⑤ 俊蔭の娘は、帝や東宮からの手紙が来ても、自分も返事をせず、屋敷にいる女房たちにも返事をさせなかったということ。

問四 傍線部（オ）「いかでか高き交じらひはせさせむ。」とあるが、その意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 31。

- ① 父である自分だけは何とか高級官僚との付き合いを断たせて欲しい。
- ② 娘にどうして高貴な方々との交際をさせられようか。
- ③ どうにかして娘を高位の人に嫁がせたい。
- ④ 自分の子は高貴な家の生活にどうしてなじめないのだろうか。
- ⑤ どうやって娘に気品ある宮仕えをさせたら良いのだろうか。

問五 本文の説明として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 32。

- ① 俊蔭の娘は父の指南によって琴の大曲を次々に習得し、やがて人並み外れた容姿を備えた女性に育ち、高貴な人の注目をも集めた。
- ② 俊蔭が久々に日本に帰ってきたとき、すでに俊蔭の父母は逝去していたので、俊蔭はとても嘆き悲しんだ。
- ③ 俊蔭は、娘が天皇の后や母になろうと、たとえ山中に生活する身分の卑しい者の妻となろうと、その行く末は天運に任せる思いであった。
- ④ 東宮の琴の師匠を辞退した俊蔭は広大な居を構え、娘に秘琴とその奏法を伝授することに専念し過ごした。
- ⑤ 高位の官職に就くことが亡き父母の悲願であったので、俊蔭はみずから進んで唐に渡り、そこで長年勉強に励んだ。

問六 次の中から『うつほ物語』の影響を受けていると考えられる作品を一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 33。

- ① 『竹取物語』
- ② 『源氏物語』
- ③ 『日本霊異記』
- ④ 『古事記』
- ⑤ 『懷風藻』